

港 湾 経 済 研 究

# 国際経済と港の動向

日本港湾経済学会年報

No. 22 1984

日本港湾経済学会編

## 序

日本港湾経済学会会長 北 見 俊 郎

港湾研究にとって、行・財政、運送業、労働、管理・運営等の港湾機能形成の諸要因のみならず、貿易、海運、国際経済等の外部経済的な諸要因との関連性を考究することはきわめて重要であります。これはあらためて申し上げてもいいことですが、とりわけ国際化の進展が著しい現代にあっては、世界経済の動向をぬきにして港の諸問題を論ずることはできません。

その意味からも本年度、名古屋港での第23回全国大会が「国際経済と港湾の動向」という共通論題をとりあげられることは、正に良き時と場を得られたものと思います。この学会年報は、自由論題をふくめ、以上の共通論題の玉稿を中心にとりまとめたものですが、思えば本学会創設以来、以上のような問題意識をどこかにもちながら、ここに初めてそうした研究発表と討論がなされることは喜びにたえません。各ユニークな自由論題の内容も、共通論題と決して無関係ではなく、本年報を基とする研究発表等が学会の新しい局面を創造してくれるものと心から期待する次第です。

それにいたしましても、今年度の大会は、中部部会、名古屋港管理組合、その他関係各位の方々のご努力のあかげで開催されることを憶い、心から厚くお礼を申し上げねばなりません。また、この年報の刊行は学会創設と共に休むことなく続けられ、22巻をむかえることができたのは、一つに賛助会員の方々のおかげが大きく、あわせて感謝の次第です。さらに、ご多用の中を玉稿をよせてくださった会員の方々と、とくに日頃めんどろな学会運営の雑事や年報編集を文字通り献身的に進めて下さる事務局関係の会員各位にも厚くお礼を申し上げます。そして毎年誠意をもって年報印刷をおひきうけくださる文化印刷株式会社の各位にもあわせて感謝致します。

終りに、研究発表、討論、年報刊行等は、学会事業の中心的役割をもつものですが、各部会活動をふくめ、益々そうした諸活動が盛んになることを祈ります。こうした学会活動はきわめてじみなものであります。その成果が直ちに社会に反映するものでもないと思われます。しかし、それだけに長期的な視野をもってたゆまぬ努力を重ねてゆくことが、学会の目的でもある「わが国港湾の健全な発展に寄与する」ことになり、社会の人たちの幸わせにどこかで貢献しうるものと思じます。さらに他面では、そうした努力の航跡が港湾経済・社会を核とする学問的形成の「一里塚」になるとも信じます。どうぞ今後とも、会員諸兄をはじめ関係各位の皆様のご教導が、学会のますますの発展のために与えられますように心からお願い申し上げます。

（1984年晩夏）

# 目 次

序	北 見 俊 郎
---	---------

## 研 究

### 共通論題

国際海上輸送革新と港湾管理	原 口 好 郎 ( 1 )
——名古屋港の場合——	
外部環境の変化と港湾経営	岡 野 行 秀 ( 21 )
国際海運の変化と港湾	柴 田 悦 子 ( 30 )
国際化の中の産業の発展と港湾	日比野 光 伸 ( 47 )
自動車産業による資本輸出と港湾	千須和 富士夫 ( 65 )
——世界資本主義の現段階——	
世界経済の中の日本経済	片 野 彦 二 ( 85 )
——港湾経済の背景——	

### 自由論題

名古屋港船舶入出港システムの現況と今後のシステム開発	永 井 武 司 ( 97 )
地域活性化をめざした港湾づくりに関する一考察	金 井 萬 造
	為 国 豊 治 (118)
水域に関する研究	中 本 昭 夫 (135)
——佐世保港を事例として——	
公有水面埋立行政と環境保全	香 川 正 俊 (151)
——行政組織行為と法的観点を中心に——	
高度情報化社会における港湾産業活動	松 橋 幸 一 (171)

## 文 献 紹 介

名古屋港管理組合三十年史編集会議編	松 浦 茂 治 (186)
「名古屋港管理組合三十年史」	
西尾一郎編著「港湾経営論」	安 彦 正 一 (191)
市来清也著「港湾管理論」	木 村 武 彦 (195)
Charls W. Hallberg “The Suez Canal”	山 上 徹 (198)
松橋幸一著「港湾物流管理論」	富 田 功 (202)

## 学 会 記 録

輸送体系の変化と港湾 (第22回) 全国大会 (松山) シンポジウム概要	(206)
部会活動状況	(211)
港湾研究文献目録	(213)
編集後記	(235)